

若山牧水全集

第十卷

若山牧水全集

雄
鷄
社
刊

若山牧水全集 第十卷

昭和三十四年四月三十日發行

著者若山牧水發行者武内俊三印刷
者草刈親雄印刷製本所東京都新宿
區住吉町九十五番地中央精版印刷
株式會社發行所東京都中央區日本
橋江戸橋一丁目七番地株式會社雄
鷄社電話千代田(27)二七九一・二番
振替東京二六二五五番

定價六〇〇圓

編集・校訂

若山喜志子
大悟法利雄

落丁、亂丁の際は
お取換えいたします。

目次

雜文

彼の一卷、この一卷	五
石火記	九
歌の話	二
耳川と美々津	一五
遠き日向の國より	一六
六號私見	二
行人獨語	七
「佇みて」を読む	三

「赤光」に就いて	四
大 會 前 記	六
誌友大會始終記	三
大 會 後 記	五
大 會 雜 觀	三
この不滿を如何	六
齋藤茂吉君へ	七
「潮音」創刊について	七
『砂丘』のこと	七
父も母も若い俤	七
「砂丘」の批評について	七
姉の讀む物語から	九
『海の聲』のこと	八
歌 日 記	八

今後の前田君の境遇	八九
先生の悪口が縁	九二
出発點一つ二つ	九五
所感	九六
旅より妻へ	九七
森、湖、及び人	一二
『海の聲』出版當時	一二
石川啄木の臨終	一二
半折短冊會を起すに就いて	一三五
大會前記	一三七
大會後記	一四〇
抗議	一五二
最近の感想	一五七
時雨酒	一五八

中央新聞記者時代

淺野君に答ふ	一六〇
安成二郎君に答ふ	一六三
汽車の中にて	一六六
大會雜報	一六九
解　　説	一七三
病床漫吟	一七六

主宰誌編輯便

不忍池の大螢狩	一九九	九月の短歌	一九九
夏の都の湊口	一八〇	靈柩を迎ふ	一九三
震後の江山	一八三	秋は寝たり偉人の墓畔	一九四
「新片町より」を読む	一八八		

明治四十四年……………一九九

明治四十五年……………二一八

大正二年	二二三
大正三年	二四二
大正六年	二七四
大正七年	三〇五
大正八年	三二七
大正九年	三五四
大正十年	三六三

大正十一年	三七四
大正十二年	三八九
大正十三年	四一五
大正十四年	四四四
大正十五年	四六六
昭和二年	四九八
昭和三年	五二一
解説……大悟法利雄	五三三

第十卷

雜

篇

雜

文

彼の一巻、この一巻

——詩集の印象——

私の中學四年の頃、肥後の熊本へ秋季修學旅行が催されたことがある。熊本では或るお寺に泊つて城や市街を見物した。その頃から私は細々と三十一文字を並べてゐて、その周圍では先づ兄貴分の地位に立つてゐた。所でそのお寺に泊つてゐたうち、右の私の弟分に當る或る一人が、とある夕、二冊の細長い妙な形の本を持つて歸つて來た。何だと訊くと、歌の本だといふ。なるほど二冊ともに歌ばかりで埋つて居る。兩方とも聊か破れてゐた所などを考へると先生古本屋から見出して來たものらしい。翌日は熊本を立つた。肥後の平野を貫いて白々した秋の道路に沿うて阿蘇山麓に進むのである。既に日向から肥後へ幾多の山河を横切つて來てゐるのでその年少い旅行隊はもう大分疲れて居た。火山の麓の宿驛の宿屋はたしか栗屋と云つた。茅葺の屋根には月がさして煤けた窓から月光裡に立昇る山の煙がよく見えた。組が違つて居るので、行進中は一寸逢ふことの出來ぬ右の男が其處へ來て、例の二冊を出して、一冊のは實によく解るが一方のは一向解らぬ、是でも歌であらうかと日向訛の獸的な調子で私に尋ぬる。よく見ると一方のは表紙に『おぼろ舟』と題してあり、一冊のは赤い文字で『みだれ髪』と書いてある。一方の『おぼろ舟』を開いて見ると、いかにもよく解る、當時の我等には實にそれが無上の佳作である様に思はれた。一方の『みだれ髪』の方を取つて讀んで見ると、例の「夜の帳にさゝめきつきし……」から

始まつて一つとして直ぐ了解の出来るといふのがない。仕方がないから、乃公にも解らんといふと、そんなら是をば君に上げよう、持つてゐたつて仕様がなまいといつて『おぼろ舟』だけを大事相に懷中して彼は去つた。貰ひ受けた『みだれ髪』を丁寧一字々と讀んで見たが中々解らない。そのくせ何だか底に奇妙なものがある様で、幾度びもくく教師にかくれて繰り擴げて見た。その翌日は愈々阿蘇に登つた。途中休息の間や歩きながらもこの細長な小形の本は幾度びか汚い小倉服のポケットを出入したものだ。阿蘇に登り、三國峠を越え豊後路から日向の國に歸りつくまで常に斯くあつた。阿蘇の舊噴火口の跡だといふ坂梨を登つて、ずうと海の様になだらかに傾斜した豊後の高原を通る時など、隊に遅れて讀みながら歩いたのなどがよく思ひ出される。その翌年の春、日向の耳川の上流の田代といふ村へ友人を訪ねて行つた。丁度友人は留守で、薄暗い百姓家の——庭さきには山櫻が咲いてゐた——部屋縁に腰かけて待つて居ると、机の上に『新派和歌評釋』といふ小さな本が載つて居る。何心なく讀み始めると、さア耐らないほど面白い。今まで唯だばんやりと瞳の前に映つてゐた神秘の國に親しく一步步を運び入れる様な氣持だ。脚絆も解かずに讀み耽つた。それに由つて私は當時の新派和歌といふものを漸く了解し得た様な氣がした。著者は黒瞳子と書いてあつた。聞けば今の平出修氏である相な。右の熊本で二冊の本を買つた男も三四年前郷里を飛び出して文學をやるとか云つて東京に出て來て、前田君などにも大した迷惑をかけてまぐくしてゐたが、途中で踏み外づして今では飛んでもない者になつて居る。先日の國からの便りによれば自殺したとも云ひ監獄に入つて居るとも傳へられて居る。『おぼろ舟』の著者は現今の人は大概知るまい、長谷川濤涯と云つた人だ。つい先頃まで數寄屋橋の

無名通信社に居るといふので、一度逢ひたいものだと思つて居るうちにもう今は居なくなつた相だ。田代村の友人は兵隊にとられて樺太に行き、朝鮮に行き、今は歸つて村の郵便局に居る相だ。來號の本誌にはその人の歌を載せたいものだ。一昨夜であつたか前田君とこの『亂れ髪』の話が出て、毎年梅の咲き出す頃になるとこの詩集が讀みたくなる、そして愈々その歌を見るとすぐいやな氣になるが、とにかくこの讀み度といふ心持だけは誠にいゝものだと思つ合つた。阿蘇を越えた『解らぬ本』はいま東京の早稻田の或る家の二階に破れ／＼で残つて居る。

同じく郷里の中學に居た頃、私の下宿してゐた大見といふ家——その息子は僕等の先輩で歌を詠み文を作つた、今は鹿兒島の港務局とかに居る相だ。名は達也といふ、同地の創作の社友中で誰か一度訪ねて行つて見給へ、背の高い、鼻の隆い男だ——に或日僕を尋ねて若い男がやつて來た。出て見るとそれは久しく逢はなんだ僕の從兄である。彼もまた家業を嫌つて家を出て諸所飛び歩いて數年間といふもの逢ふことが出来なかつたのだが、或時僕の投書した作文か何かを何かの雑誌で見て僕が村を出て某町中學に入つて居る事を知り學校宛に手紙を呉れ、爾來幾度びか文通をばして居た。從兄を見て僕はもう嬉しくて／＼仕様が無かつた。勿論彼の歸國は失意のはてである。彼はその夜酒に酔つてまだ子供の從弟を捉へて感んに慷慨した。そして汚い風呂敷包の中から取出して大聲に讀み始めた本がある、それが即ち薄田泣菫氏の『ゆく春』であつたのだ。從兄には、確かに眞の意味の天才の素があつた。當時彼の作つてゐた長詩、短歌等を思ひ起して見ると、目下盛んに作られつゝある象徴ぶり官能ぶりの作風に全然適合して居る。惜しい事に彼はまだ國にも歸らず、事をも爲さず、いまは福岡の近所に哀れな生活を送つて居るらしい。

もう三十を餘つ程越したであらう。餘談はおき、その『ゆく春』は著者から時任霧峯に贈られたとかいふので、霧峯はまた從兄に贈つたといふ履歷つきのものであつたと記憶する。霧峯とは當時の新詩社で羽振を利かせた人で、與謝野さんなどはよく御存じだらうと思ふ。今でも時々新詩社詠草の中に名を見る園田愛綠氏なども從兄の知人であり、尙ほ熊本縣の緒方雁峯などと云つた人もあつた。恐らく『ゆく春』ほど僕の愛讀した本はないだらう。いつしか一字一句を悉く暗記して、山に行き海に行く時など殆んど間斷なく僕の唇頭にその中のどの詩かぐ上つてゐた。東京に上る時もその本を——言ひ落したが、從兄からその履歷つきの本を強奪しておいたのだ——携へて來た。そして散歩や旅行に出る時など一度として缺かしたことはない。だから中國や紀州や色色な國々をこの本は旅行した。身體に似合はず僕の咽喉は美しい聲を出す、そのいゝ聲で實に幾百千度か吟じ上げられたものだ。所がいまは僕の手許にその本がない。知つて居る人は知つて居るだらう、もと僕等が雜誌新聲に歌を出してゐた頃、一緒に出してゐた關葩水と云つた男がある、小學校からの友人で中學を途中で止し、大阪に出て繪をかいゐた。その男の戀人が矢澤孝子君の友達であつたか何かで矢澤君も屹度この男を御存じだらうと思ふ。本をばその男に呉れて了つたと覺えて居る。この記憶にして相違が無かつたならば、葩水は昨年死んで了つた、それと共に我が愛する『ゆく春』一巻の行衛も終にもとめ難いであらう、——その後一二冊買求めたが、思はるはあの古い破れた一冊である……森の家より野に出でて、ゆふべの雲を眺むれば、緋緘裂けし落武者の、すがたに似たる春の暮、穗の毛のびたる大麥の、畑にかくるゝ笛の音よ……。

噫、希くば今夜我をして一椀を傾け、かの滿卷の詩を高誦せしめむことを！（明治四十三年）

石火記

——「創作」誌友會の記——

▽あの日の會合の象徵をわが北原白秋君となす。その故は、息せきと馳けつけて、来るや否や、わアつといふ騒ぎに忽ちもう眼が見えなくなり、忽然としてまた脱兎の如く京橋は木挽町まで走せ歸り、二階の部屋から室内の書籍を悉く庭に投じた同君の情緒氣分は即ち當日の會合そのものの情緒氣分であつたと認知せざるを得ないのである。

▽僕は當日の朝、田端の小杉未醒氏の宅から出て來たのであつた。途中で綠葉君と落ち合つて十二時すぎに會場へ行つた。行つて見ると今朝の十時から來て待つてゐる人があるといふ。見れば山崎阿木良君であつた。同君とは昨秋信州で逢つて知つてゐる。

▽縁側の日向で來る人を待つてゐる間のつらさといつたらなかつた。四邊の樹木はすつかりもう芽を吹いて櫻が汗ばんだ様にそこらに散り亂れてゐる所など、すつかり晩春初夏の重苦しい氣分で、どうしてもじつとしてゐることが出來ない。その心を抑へて鹿爪らしくしかも甚だ呆然として人を待つところもちといつたらなかつた。其處へ火事だといふ。この風では定めし焼けることであらうね、一體何處です、吉原ですよ、左様ですか……などとやつてゐるものの何だかひどく氣が氣でない。

▽來る筈の人がなく／＼來ない。火事の方に取られましたよとみんな恨めしさうな泣き出しさう